

## 【要旨】

### 肖像としての家具

美術研究科美術専攻デザイン研究領域 後期博士課程3年 高井碧

## 【研究内容】

筆者の関心は、家具・道具を、絵画的・彫刻的に表現することにある。本研究では、他者が収集した物を置く家具を制作し、収納・配置されている状態を完成状態とすることで、他者のパーソナリティを筆者の視点で作品に変換することは可能性か問うものである。

人間が生活の中で何かを選択し収集することは、常に行われている普遍的な行為である。筆者は、選択肢の集合体は、個人のパーソナリティであり、それらから着想を得て、他者が選択した物を置く場所を形作することは、肖像を作る行為と似ていると考察した。肖像は、モデルである像主の人柄や過去の経験を踏まえ、肌や髪の特徴を観察し、実物を描写するのみならず、像主の人生をも描こうとするためである。筆者は、ある個人のコレクションを置く家具を作ることで、家具は肖像になりえるのか、制作を通して実践的に論考する。また、この論文の中で「ある人の顔・姿・人格をうつしとることを試みた、絵・写真・彫刻の像」という意味で「肖像」という言葉を使う。

第1章では、筆者にとって肖像で描く対象が、何を指すのかを明確にする。肖像画家の諏訪敦の作品と論述をもとに、肖像を描く人間と、描かれる人間の関係性について着目しながら、肖像が追い求める表現とはどのようなものか、理解を進める。次に、写真家・編集者である都築響一の著書を参照しながら、棲家に表出する、家主のパーソナリティについて論じる。また一人暮らしをしている人の家を訪れ、写真を撮り、家主に話を聞くことで、生活空間と収集物が持つ、人のパーソナリティについて考えを述べる。

第2章では、家具という言葉の歴史から遡り、インテリアデザイナーの倉俣史朗を挙げ、筆者にとって家具の存在と造形が、どのような意味を持っているかを明らかにすることで、家具という言葉の定義を再確認する。

第3章では肖像と家具が結びついた理由を、作品を時系列で追いながら考察する。家具という言葉の歴史から遡り、制作を通して、家具と肖像が繋がるまでの思考の流れを追う。人と家具の関係性に関心を抱くきっかけとなった野外にあるバス停に装飾を施した《高遠バス停アートプロジェクト》(2019-20)、セルフポートレートだと自覚する起点となった《夕日の街》(2022)、他者の肖像を作るために祖母を像主とした《アクセサリーボックス》(2023)、リサーチを行い制作した友人の肖像である《ベビーベットの宝箱》(2023)を詳述する。また、陶土や七宝といった可変性のある素材を扱う理由について言及する。

第4章では、前章を踏まえて制作した博士審査展出品作品について述べる。出品作品は、1950年代に新潟市の職場演劇の団員として活躍した祖父を像主とした肖像作品である。祖

父が所有していた台本や資料を置く家具を制作することで、祖父の肖像を作る。タイトルを《演劇人の傍白》とし、4点の家具を制作し、一つの作品とした。保管されていた脚本の中から3本の戯曲を選び、それにまつわるノートや写真を置く家具を3つ制作した。加えて、祖父が観劇した公演のチケットやパンフレットを置く椅子を数個制作し、1セットとした。それら4点を点在させた空間を一つの作品としてまとめることで、演じる側と観る側の視点を持った、演劇人の肖像を制作することを試みた。

最後に、出品作品を通して、家具を肖像作品として制作したことに対する幾つかの答えと、自覚した筆者の視点について述べ、結論とする。